

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520293

研究課題名(和文) 偶像崇拜・偶像破壊論争とジョン・ダン

研究課題名(英文) The Idolatry-Iconoclasm Controversy and John Donne

研究代表者

滝口 晴生 (TAKIGUCHI, Haruo)

山梨大学・総合研究部・教授

研究者番号：40226957

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：偶像崇拜・破壊論争という切り口を通して西欧精神が、聖なるもの表現をどう捉えてきたかをキリスト教誕生の初期から古代末期、中世そして宗教改革時代までたどり、その文学的反映を16・17世紀詩人に見るといふ研究であり、「偶像崇拜の記号論」と題して5回分の論考を発表し、古代における偶像崇拜・破壊論争の有り様を概観し、また「ダンの「蚤」とルターの聖像破壊批判」においてルターの詩においてルターの思考の反映があることを指摘検証した。

研究成果の概要(英文)：The main theme is to obtain a general picture of how Europeans have expressed the sacred, discussing its problems in terms of the idolatry-iconoclasm controversy from the beginning of Christianity to the Medieval ages to the Reformation, and after that, to focus on its reflections in the literary works of the English poets of the 16 and 17 centuries.

The research results are being published in the form of a series of essays titled A Semiotical and Historical Study of Idolatry (5 essays already published) and an essay focused on Donne's The Flea, which I presume refers to Luther, is also published, titled Donne's The Flea and Luther's Attack on Iconoclasm.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：偶像崇拜 聖像破壊 ジョン・ダン ルター ビザンチン帝国 図像

1. 研究開始当初の背景

偶像崇拜の問題はとりわけて宗教的問題であるが、図像に対する人間の精神態度という観点からみれば、より一般的な人間精神の特徴的表れと見ることもできるだろう。したがって、偶像崇拜の問題は個別の宗教からどのように捉えられてきたか、特にユダヤ=キリスト教の伝統ではどのように捉えられてきたか、なぜ偶像崇拜は禁止されるのかという問題を扱った書物が刊行されるようになった。ハルバートル/マルガリート『偶像崇拜その禁止のメカニズム』(翻訳2007年)は哲学的なあるいは心理学的な問題としてこの問題を扱い、偶像崇拜という問題をより広い視点でみるひとつの契機となった。

文学研究において、偶像崇拜、特に偶像破壊運動の歴史を踏まえての十六・十七世紀文学の研究は、ギルマンの研究(Ernest E. Gilman, *Iconoclasm and Poetry in the English Reformation*, 1986)がおそらく唯一の本格的な研究であった。したがって、ギルマンの研究にも、とりわけジョン・ダンの詩の分析において、不備な点がいくつか見られたのである。したがって、偶像崇拜・偶像破壊論争という視点から、キリスト教史を見直した上での、十六・十七世紀の文学との関連を研究した論考という意味でのギルマンの後継が待たれていた。

本邦においては、聖像論争に関する本格的な研究として、若林啓史『聖像画論争とイスラーム』(2003)があり、アラビア語文献から説き起こした貴重な文献である。当時の最新の研究書として浅見雅一『キリシタン時代の偶像崇拜』(2009)が出版されたが、西洋の議論に基づきながら、日本人と偶像崇拜の問題が論じられ、偶像崇拜がより厳密な議論の場に乘せられる契機になったとおもわれる。研究書ではないが、美術史の視点からは、『西洋美術研究』が「イメージの中のイメージ」(vol. 3 2000)に聖像と偶像の問題を論じた論文を載せ、さらに「イコノクラスム」の特集を組んでいる(vol. 6 2001)。しかしキリスト教世界における文化史的な視点で書かれたものは、わずかに香内三郎「イコン・イメージ論争の歴史的意味」(2003)が見出される程度であった。

聖像に関する宗教的論争と、詩のイメージとは西洋思想の中で密接に結びつくものであるが、キリスト教初期から宗教改革にいたるまでの図像にまつわる論争を跡付けながら、十七世紀における詩のイメージがどのような宗教的背景とからんで提出されているのかという歴史的な視点を踏まえた文学論考あるいは文化史的論考の出現が待たれていたと言えるだろう。

2. 研究の目的

(1) キリスト教初期、すなわち313年ナントの勅令によるキリスト教公認以前の図像の問題、公認後から偶像崇拜・偶像破壊論争が始まるまでの図像の問題(4~7世紀)、そして8、9世紀の第一次、第二次という本格的な偶像崇拜・偶像破壊論争そのものという3つの時期に区分して図像に対する宗教的な認識を跡付ける。第1期は主にカタコンベに見られる図像の特徴とその時期におけるキリスト教徒の図像に対する姿勢を明らかにする。第2期は、いわばこの論争の萌芽期であり、ある意味断片的な表明を結び合わせて図像に対するどのような態度が見られたかを整理する。第3期は論争そのものが生じた時期であり、コンスタンチノス5世の見解対ダマスカスのヨアンネニス、コンスタンチノーブル総主教のニケフォロス、そしてストゥディオス修道院長テオドロスという対立軸の中で、議論の中心の問題を明らかにする。(2) 古代の偶像崇拜・破壊論争後、中世カトリック教会が採った図像に対する態度を、『カロリング文書』(*Libri Carolini*)を起点として、後の聖像の蔓延や、聖者崇拜にいたる歴史を、教理の面から考察する。

そして反カトリック勢力が生じたいわゆる宗教改革時代となり、実際に偶像破壊運動も行われ、政治的宗教的な外面の変動を踏まえながら、図像に対する宗教的認識がどのように変化したかを分析する。とりわけ象徴的な議論は、秘蹟に対する議論であり、ここに代表的な宗教改革者、すなわち、ルター、ツィングリ、カルヴァンの見解の相違が先鋭的に現れているのである。したがって、それぞれの議論の相違を、記号論的思考を取り入れて読み解く。その中にやがて近代へと向かう人間意識の変移を垣間見ることになるだろう。

(3)(1)と(2)で得られた歴史的背景、宗教理論的背景に照らして、イギリスにおける宗教改革の歴史的推移を跡付ける。そして、イギリスにおいても、エドワードの時代に、聖像破壊が行われ、教会内の聖画像が損傷されたが、それらの影響を同時代の文学作品の中に認められるかもしれない。そのような痕跡をたどりながら、十六・十七世紀詩、特にエドモンド・スペンサー、ジョン・ダン、ミルトンの作品において、偶像崇拜・偶像破壊運動の反響をその文学的表現のうちに見出し、分析する。エドモンド・スペンサーは『妖精女王』におけるイメージの取り扱いを中心に、ジョン・ダンはその詩のイメージと宗教的な著作である説教に見られるオーソドックスの見解との微妙なずれから浮かぶ図像に対する彼の意識を中心に、そしてミルトンは彼の「偶像破壊破壊者」と他の作品との関係を中心に分析する。

3. 研究の方法

(1) キリスト教公認以前の図像、公認後の

図像、八世紀の聖像画論争、中世における図像論に関する文献を収集することが必要である。キリスト教公認以前の図像に関しては当時の文献が皆無であり、図像そのものを見、また配置を考察するという考古学的なアプローチをとる。キリスト教後任後、文献が現れるようになってからは、文献を読むことになるが、初期の文献はほとんどがギリシア語である。*Patrologia Graeca*にはラテン語対訳がついており、ラテン語訳で読むこともできる。したがって、英訳を利用しながらも、できるかぎり原語での解説に努めるために、ギリシア語の習得を行う。最新の研究書は入手できたが、そのほかの多くのキリスト教関係の辞書類、叢書は所蔵図書館に赴き、資料を閲覧する。特に南山大学神学部図書室、上智大学図書館、神学部図書室において、カタコンベ図像、キリスト教関係叢書類、神学的著作を閲覧する。

(2) 宗教改革時代における図像に関する各プロテスタント各派の態度をまず概観する。またこの時代、近代における最初のいわば偶像破壊運動が生じている。これはカールシュタットが行ったものであるが、これに対してルターは批判文書を書いており、これが近代の論争のひとつの型として分析できるであろう。しかし、宗教的な中心問題として聖餐に関する論争が起こっていた。それはプロテスタント各派の分裂の元ともなったのであるが、これこそ眼に見えるものと聖なるものとの関係をどう捉えるかという根本問題を提起しており、プロテスタント各派の代表である宗教改革者の著作から、その見解を抽出し、比較分析することで、近代的意識への方向性が見えてくるだろう。またこの際記号論的なアプローチが有効となるだろう。

(3) イギリスにおける宗教改革の経緯、すなわちヘンリー8世のカトリック意識とトマス・クロムウェルのプロテスタント的政策、エドワード時代における聖像破壊、メアリーのカトリック回帰、そしてエリザベスの宗教的政策という流れを概観し、時代背景を形作る。特に教会における図像の損傷について文献を収集する。

以上の背景をもとに、16・17世紀の文学作品に宗教改革という時代の動きがどのように反映されているか、とりわけ図像に関して詩人たちに影響を与えたのか否かという問題を扱うため、まず代表的な作品の読解を行い、反映場所を指摘し、それらを抽出してゆき、データが集まった段階で総合的な分析を試みる。それぞれの作品における文学的なイメージの扱い方と、聖像に対する見解や態度との一種パラレルな関係を導き出す作業となるだろう。

4. 研究成果

(1) 古代末期までのキリスト教史における偶像崇拜・偶像破壊論争を、「偶像崇拜の記号論」5回分で跡付けた。

第1回は、偶像崇拜という精神のありようを概説した。つまり偶像崇拜は、人間精神の奥深く根ざした精神習慣ともいべき現象であること、それは人間が記号と言うものを扱い、その記号というものにある種魔術的に精神が取り込まれていく過程であることを、記号的分析を踏まえつつ概論として論じ、本論の導入としたものである。

第2回は、先ず初期キリスト教とローマ帝国の関係性を述べ、ローマ人からキリスト教徒がどのように見られていたかを検証しつつ、キリスト教公認以前のカタコンベ図像の意義を考察した。当時の文献が皆無のために、カタコンベ図像の意味を推し量るのは難しいのであるが、キリスト教唯一の現存地上遺跡であるドゥラ・エウロポスの壁画と比較することで、カタコンベ図像の意味を推定し、共通の図柄から見えてくる初期キリスト教徒の図像に対する態度もあわせて考察した。第3回は、キリスト教公認後から754年の公会議までに出現した図像に関する文献上の言及を取り扱った。これは三つあって、ひとつはエウセビオスが皇妃コンスタンチアに当たった書簡、二つ目はサラミスのエピファニオスの著作とされるもの(偽書説もある)そしてエルヴィラ教会会議(313年)の条項である。これら図像に関する重要な初期の三つの文献を考察し、第1次聖像破壊運動が起こる以前の論争的背景を示した。

第4回では、本研究の最初の中心部分である聖像破壊運動の始まりを扱った。これはビザンチン皇帝レオ3世とその息子コンスタンチノス5世によって政治的に始められた運動であり、皇帝主導の下コンスタンチノーブル教会会議(754年)で聖像破壊の決定を行った。それに対する反論としてダマスカスのヨアンネスの聖像擁護論が登場した。さらにタンチノスはキリスト論を前提とする強力な論理を提出し、これらの論の骨子を整理し、対立構造を明確にするとともに、これらがこの論争の原型ともいべきものがこの時代に形作られたことを示した。

第5回は、ニケーアの第7回公会議(787年)において754年の決定を覆す過程を議事にしたがって整理した。会議ではコンスタンチノス5世の見解が逐一反駁され、聖像擁護論が勝利を収めるのであるが、その反駁の中心人物はコンスタンチノーブル総主教ニケフォロスとストゥディオス修道院長テオドロスの意見であった。彼らの反駁論を比較分析し、表現は異なるが両者が同様の思考を用いて反駁を行ったことを示した。

以上で古代における偶像(聖像)破壊論と聖像擁護論との論争史の跡付けは終了したことになる。

(2) 古代の論争の跡付けと同時に、ダンの

詩のイメージの分析も並行的に行った。彼の詩のひとつ、「蚤」と題する詩には、聖像破壊運動の反映とみなされうる言説があることに注目し、その言説とはいかなるものかを「ダンの蚤とルターの聖像破壊批判」(『十七世紀文学を歴史的に読む』)と題する論考において論じた。

ダンとルターの関係は従来注目されるどころではなかったが、ダンはずっとに宗教改革者の著作を読んでいたことを検証するために、ルターへの言及を初期の著作において指摘し、とりわけダンがラテン語で書いた『廷臣の書斎』(The Courtier's Library)にはカールシュタットの名前への言及が見られることから、ルター周辺の人物を含めて、ダンはルターに関する知識を持っており、またいくつかの宗教的議論を読んでいたことが推定されたのである。

そのような知識の背景上に、「蚤」を置いてみると、話し手と女性との議論は、聖像破壊運動を先導したカールシュタットに対するルターの批判論とほぼ平行な論理展開が浮かび上がってきたのである。ルターが示した破壊運動批判の論理は、きわめて特徴的で、ダンがルターを読まずして同じ論理に到達したとは考えがたい。したがって、文献的な証拠にいたることはできなかったが、状況証拠的には、ダンはルターの破壊運動批判を読んだと推定されるのである。

本論はダンのこの詩におけるルターの影響を論じた最初のものであろう。

以上は現在までにおける研究成果であるが、「偶像崇拜の記号論」としての論考は継続される。古代の論争は終了したので、次はカトリック中世における図像の問題を取り扱うことになる。まず取り扱うのは『カロリング文書』(*Libri Carolini*)である。これは、ニケーア公会議の結論に対して、異議を述べたものであり、のちのカトリック教会の図像論の原型となるものであろう。したがってニケーア公会議の結論がいかに変形されカトリック教会の教理的な見解となる過程を追跡する。

その後は宗教改革時代という大転換の時代を迎え、聖餐に関する見解を明晰な形で整理する段階に入る。これは本課題の第2の中心点になるはずのものであったが、助成期間中には達成できなかった部分である。

以上の考察と同時に文学方面での論考を進める必要があり、まずはダン以外の詩人として、スペンサーの『妖精女王』におけるイメージの提出と破壊について分析することが次の課題となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

滝口晴生、偶像崇拜の記号論(5)、山梨大学教育人間科学部紀要、無、第16巻、2015年、45-52頁

滝口晴生、偶像崇拜の記号論(4)、山梨大学教育人間科学部紀要、無、第16巻、2015年、37-43頁

滝口晴生、偶像崇拜の記号論(3)、山梨大学教育人間科学部紀要、無、第15巻、2014年、83-90頁

滝口晴生、偶像崇拜の記号論(2)、山梨大学教育人間科学部紀要、無、第14巻、2013年、256-64頁

http://opac.lib.yamanashi.ac.jp/opac/repository/1/29258/14_256-264.pdf

滝口晴生、偶像崇拜の記号論(1)、山梨大学教育人間科学部紀要、無、第11巻、2011年、259-68頁

http://opac.lib.yamanashi.ac.jp/opac/repository/1/29044/12_259-268.pdf

〔学会発表〕(計 1 件)

滝口晴生、ダンとミルトンのアルミニウム主義、十七世紀英文学会、2011年2月19日、大東文化会館(東京都板橋区)

〔図書〕(計 1 件)

滝口晴生、村里好俊、川井万里子、勝野由美子、高橋正平、笹川渉、中山理、大島範子、吉中孝志、大久保友博、齊藤美和、川田潤、高野美千代、金星堂、十七世紀文学を歴史的に読む、2015年、298頁(65-86頁)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.ccn.yamanashi.ac.jp/~htaki/yoseki.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

滝口 晴生(TAKIGUCHI, Haruo)

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：40226957

(2)研究分担者

該当者なし